

名勝哲学堂公園 樹林地（斜面林）の管理方針

哲学堂公園内の樹林地における保全・管理の考え方（これまでの経緯）

名勝哲学堂公園保存活用計画（令和5年3月）

- ・哲学と自然とが一体となり造り出された風致景観を保全する（基本方針2）
 ー貴重な自然の景観と安らぎの場、身近な自然と触れ合う機会を与えてくれる樹木を保全し、七十七場とともに明治後期から100年以上をかけて形成された風致景観を保全する。

名勝哲学堂公園再整備基本計画（令和6年3月）

- ・園内の樹林地（斜面林）については自然植生が優占する豊かな階層の樹林構成を目指し、植生の健全性や生物多様性、景観の維持・向上を図る。
- ・場所ごとの違いを考慮した将来目標を設定し、環境の急激な変化を避けながら、少しずつ目標とする植生へと近づけていく。
 ※要注意外来生物であるトウネズミモチと、周辺施設や植生に影響するクスノキは、将来的な自然植生への置き換えも視野に対処を検討する。石積等の安全性に影響する樹木は、調査のうえ適正に処置する。

名勝哲学堂公園再整備基本設計（令和7年3月）

- ・樹林地（斜面林）においては、国名勝としての風致景観の保全と、樹林地内に生息する鳥類、昆虫類等の生息環境に配慮しながら、段階的に植生改善を進めていく。

初期整備の項目（令和9年度頃を予定）	
地形・安全の確保と	<ul style="list-style-type: none"> ・石積や斜面等の安全性に影響する樹木のうち、緊急度の高いものを伐採、剪定する。 ※文化庁指針に基づく石積診断調査結果を踏まえて判定 ・ササの無いエリアのうち、園路沿いに土砂流出が見られる箇所については、林内への日照を確保する剪定や間引きを試験的（局所的）に行い、林床植生の生育を促す。
自然植生への置き換え	<ul style="list-style-type: none"> ・巨木化し、根が園路や文化財施設等を壊し始めているクスノキは、将来的な置き換えを念頭に、樹幹を抑制する剪定を行う。 ・周辺樹木を被圧しているクスノキは、樹冠を抑制する剪定を行い、自然植生を構成する若木の育成を図る。
景観の改善	<ul style="list-style-type: none"> ・要注意外来生物であるトウネズミモチのうち、周囲の樹木との競合が見られるものについて、一定数を伐採する（競合する樹木を残すことで、林内の緑量を維持する）。 ・現況の自然植生構成種は保全する。
景観の改善	<ul style="list-style-type: none"> ・ササの生い茂るエリアは、鬱蒼とした景観を改善するため、背後の景色が見透かせる程度にササの刈込を行う。 ・ただし、ヤブの環境を好む鳥や昆虫等の生息場所の確保のため、一部を高く刈り残す。

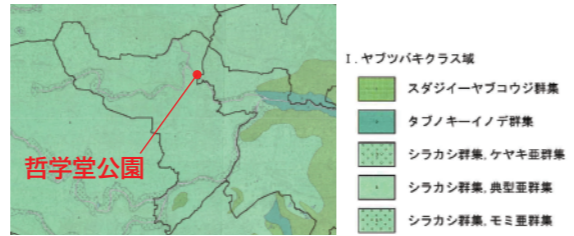
長期的管理の主な項目（想定）	
→	<ul style="list-style-type: none"> ・石積や斜面等の状況を定期的に観察しながら、それらの安全性に影響する樹木を適切に対処する。 ・倒木や枝折れ等の危険性のあるものは日常的に点検し、その都度適切に対処する。 ・園路周辺に適度な見通しを確保する剪定や実生木の除去等を適宜行う。
→	<ul style="list-style-type: none"> ・初期整備後の生育状況を見ながら、土砂流出が見られる箇所を中心に、林床植生の生育を促すエリアを少しずつ拡大していく。
→	<ul style="list-style-type: none"> ・クスノキ周辺の園路等の破壊に至ったり、周囲に自然植生の樹木が十分成長した段階で、順次、高木層の置き換えを進める。 ただし、クスノキは玄一氏の時代に苗木を植樹した記録も残っており、不必要に数を減らすことはしない。
→	<ul style="list-style-type: none"> ・初期整備を行った以外のトウネズミモチについて、周囲の緑量や食餌木の分布等にも考慮しながら、少しずつ数を減らしていく。
→	<ul style="list-style-type: none"> ・林内の実生木や林床植生のうち、シラカシ等の自然植生構成種や、周囲の樹林地でよく見られる在来の植物は選択的に保全・育成し、樹林の多様性を高めていく。
→	<ul style="list-style-type: none"> ・ササの無いエリアにおいて、林床植生が生育する目途が一定程度立ち次第、ササの刈込範囲を順次増やすなどし、多様な林床環境を形成していく。

本方針は、この各項目の作業内容や進め方を具体化するもの

植栽管理方針の位置づけ

- ・再整備基本計画が掲げる「**自然植生が優占する豊かな階層の樹林**」を目指すため、目標とする樹林の姿を示すとともに、それに向けた管理の手順や作業内容などを示すものです。
- ・この方針に基づき、今後は区と指定管理者が役割分担等を図りながら、長期にわたり管理を行っていきます。
- ・対象期間は当面の間としますが、名勝哲学堂公園保存活用計画や再整備基本計画の改定を契機に、この方針についても見直しを検討します。

【自然植生について】
 人間の影響を一切停止したとき、気候や立地条件などにより生じる植生を、潜在自然植生といい、地域固有の生態系を支えてくれるものです。哲学堂公園の周辺には「シラカシ群集、典型亜群集」が広がり、妙正寺川沿いは「シラカシ群集、典型亜群集」が占めています。



（出典：東京都潜在自然植生図）

【樹林の階層構造について】
 階層構造が発達した樹林では、様々な植物が異なる高さで光や水、栄養を分け合うことで、長期的に安定した生態系が育まれると言われ、雨水の涵養や土壌の保全、動物を含めた生物多様性の向上につながります。
 右図は、高木層～草本層まで、それぞれの階層を形成する自然植生の構成種を示したものです。**こうした植物を保全・育成し、次の世代へ継承していくことを目指します。**

哲学堂公園周辺における潜在自然植生構成種の一覧	
潜在自然植生	代償植生※
エノキ、シラカシ、シロダモ、ケヤキ、ムクノキ、アラカシ、スダジイ	イヌシデ、クリ、クヌギ、コナラ、ヤマザクラ
シラカシ、カゴノキ、モチノキ、ヤブツバキ	アカシデ、イヌシデ、エゴノキ
イロハモミジ、サカキ、サネカズラ、シロダモ、ツルグミ、ネズミモチ、ヒサカキ、ムラサキシキブ	アケビ、イヌツグ、ガマズミ、カマツカ、サワフタギ、マユミ
オオバジャノヒゲ、オクマウラビ、オモト、ジャノヒゲ、ドクダミ、ベニシダ、ミズヒキ、ヤブソテツ、ヤブコウジ、ヤブラン	アオツツラフジ、アマチャツル、オニドコロ、コチヂミザサ、サルトリイバラ、シラヤマギク、スイカズラ、タチツボスミレ等

出典：東京都「植栽時における在来種選定ガイドライン」

※潜在自然植生に人間の手が加えられて置き換わった二次林などを、代償植生といいます。哲学堂公園周辺は「コナラクヌギ群集」で、武蔵野の雑木林に見られる植生です。



階層構造の豊かな樹林のイメージ
 （出典：環境省「公共施設における緑地等の整備及びその管理、並びに市民参加型自然環境調査手引書」）

樹林地管理の基本方針

妙正寺川沿いにまとまって残る斜面林としての機能と、これまでの植生の変遷、現地状況等を考慮し、以下の3点を基本方針とします。

※このほか、利用者の安全確保や病害虫への対応など、随時の対応が必要な管理については、適時行っていきます。

1. 場所（エリア）ごとの違いや特性を生かす

哲学堂公園の樹林地は、明治後期から100年以上をかけて形成されたひとつながりの緑地ですが、細かく見ていくと、その遷移*の段階や樹種構成などは、場所ごとにさまざまです。また、哲学堂七十七場との景観的な調和も重要です。こうした場所ごとの違いや特性に応じて「大切にすべき要素」や「対処が必要な事項」などを見極め、樹林としての個性を尊重した管理を行っていきます。
※植物のない場所に、初めに先駆植物（草本や地衣類など）が定着し、その後年月をかけ、次第に立地条件に合った状態へと移行変っていく過程のことです。

2. 植生の多様性と健全性を保つ

樹林は、さまざまな生物が共存し、相互作用をなすことで支えられ、その多様性を保つことで、病害虫や風害などからの回復力も高まると言われます。哲学堂公園の場合、生育旺盛な常緑広葉樹が密生して成長し、他の樹木や草本類が育ちにくい状況が散見され、このまま遷移が進むと、全体としての多様性や健全性が失われていく懸念があります。このため、現況の植生も尊重しつつ、樹林の中にさまざまな環境が混在した状態を保つことで、多様な樹木や生きものが健全に共存できる環境を、将来へ受け継ぐことを目指します。

3. 表土の安定と保全に努める

斜面林には、雨水の涵養や土壌の安定などを通じて、環境を保全するはたらきがあります。しかし、日照が極度に遮られることなどから、表土があらわになり、雨天時の土砂流出につながっている現状があります。そのような状態では、林内に栄養分も貯えづらくなります。こうした場所では、林床植生が生育できるよう日照環境を改善することが望まれますが、そのために高木層の急激な変化が想定される場合には、補植や簡易的な粗朶柵の設置などを含め、適材適所での対応を検討します。

園内に生息する生きものへの配慮

指定管理者による巡視や、区環境課で令和6年度に実施した調査により、樹林地で見られるさまざまな生きものが確認されています。管理にあたっては、こうした生きものが好む環境（表中下線部）にも配慮して行っていきます（下の表は、鳥類の例です）。

なお当面の間は、誘引する種を特定せずに、多くの野鳥や昆虫類が適応できるような、樹林としての自然な姿を尊重していきます。

種別	種名	習性等
夏鳥	サンコウチョウ	近くに水場がある、暗い林などに飛来する。
冬鳥	シメ	落葉広葉樹の実などを割って食べる。
	ツグミ	よく茂った林やヤブをめぐりに暮らし、落ち葉や土をほじって餌を探す。
留鳥	シロハラ	茂みなどに潜み、地上で餌を探す。警戒心が強い。
	エナガ	落葉広葉樹林に良く生息し、樹木の上部や葉が茂ったところで虫などを食べる。
	コゲラ	落葉広葉樹林などを好み、枯れ木にくちばしで穴を掘って巣をつくる。
	ウグイス	林の中の茂みやヤブの環境を好む。
	キクイダタキ	準絶滅危惧種（都）。針葉樹の枝先などを好み、葉の茂みを移動しながら虫などを捕食する。

エリア区分と、各エリアの主な特徴

樹林地における樹木（実生木を含む）や林床などの分布、樹種、大きさなどを把握するための調査を、令和7年度に実施しました。この結果を踏まえた植生の違いや、空間の特性などを踏まえ、A～Fの6つにエリア分けを行いました。エリア区分と、各エリアの主な特徴について、以下の図に示します。

※全域が名勝指定地内であり、名勝の構成物の保全に支障をきたす場合には、必要な措置を講じていきます。
※樹林地の外にある個々の樹木については別途、適正に日常管理を行っていきます。



エリアの現状

スロープ園路が通る緩やかな斜面上に、常緑広葉樹（クスノキ等）及び落葉広葉樹（イチヨウ、エノキ等）の大径木が点在し、高木層を形成します。徐々に常緑広葉樹への遷移が進みつつあり、サクラ類などの生育は難しい状況です。亜高木層の常緑広葉樹が所々で日射を遮るなどし、草本層（林床）の発達度合いは、場所により異なります。

- 樹木凡例
【常緑樹】
●トウネズミモチ
●クスノキ
●シラカシ
●その他常緑樹
●落葉樹

- 林床植生凡例
■⑤80%以上
■④50~80%
■③50%程度
■②30~50%
■①30%以下
■無植生
■低木類(公園植栽)



クスノキの根が成長し、階段を壊し始めている



草本層（林床）にササが繁茂する



さくらの広場隣接部は、上空が開けて明るい空間となっている



日射が遮られ、草本層（林床）は疎らになっている



テニスコート周辺はシラカシを中心とした常緑樹が密生する



常緑広葉樹に被圧され、ヤマザクラの健全な生育は難しい



亜高木層に常緑広葉樹が密生し、林床への日射を遮っている

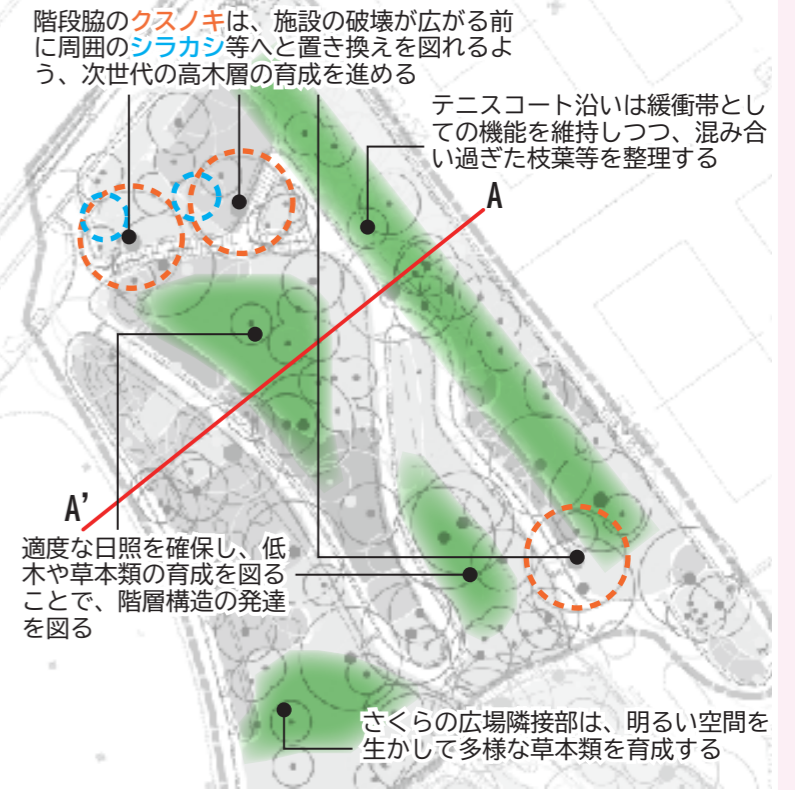


外来種（トウネズミモチ）が他樹木に寄生している

エリアの管理方針

常緑広葉樹が優占する安定した樹林を目指し、自然遷移に任せることを基本とします。低木や草本の生育を促すことで、階層構造の発達と、生物の生息環境の向上を図ります。

- ・林内への適度な日照確保のため、混み合った亜高木層を中心とした剪定等を行います。
- ・亜高木層を中心とした植生について、植栽帯内部で密度を高く、園路沿いで密度をやや低くすることで、林内に疎と密の変化を与えます。
- ・生育が良好な落葉広葉樹の保全を図るため、被圧する周囲の常緑広葉樹の枝葉を剪定します。
- ・実生木は、将来の生育空間を考慮した上で、高木層を形成するシラカシ、エノキ、イヌシデや、アオキなどの低木を中心に、選択的な保全、育成を進めます。
- ・ササ刈りにあたっては、育成対象の実生木に留意して行います。

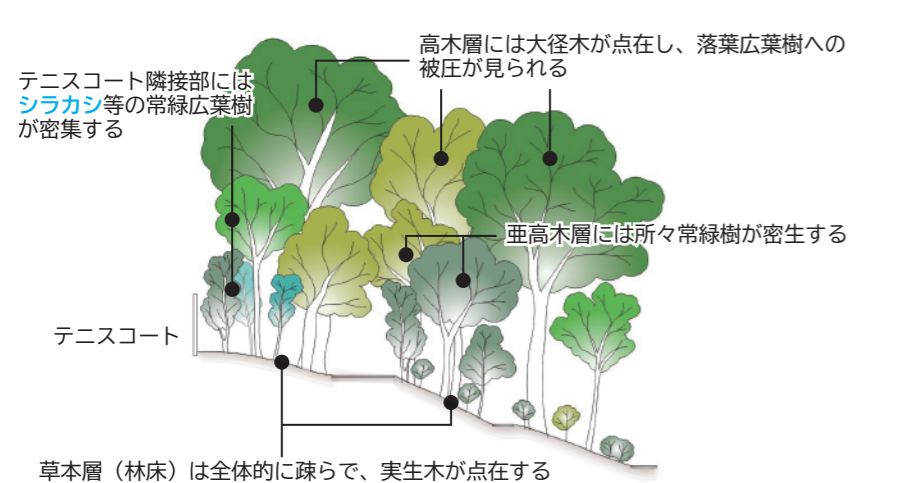


主な管理作業の内容

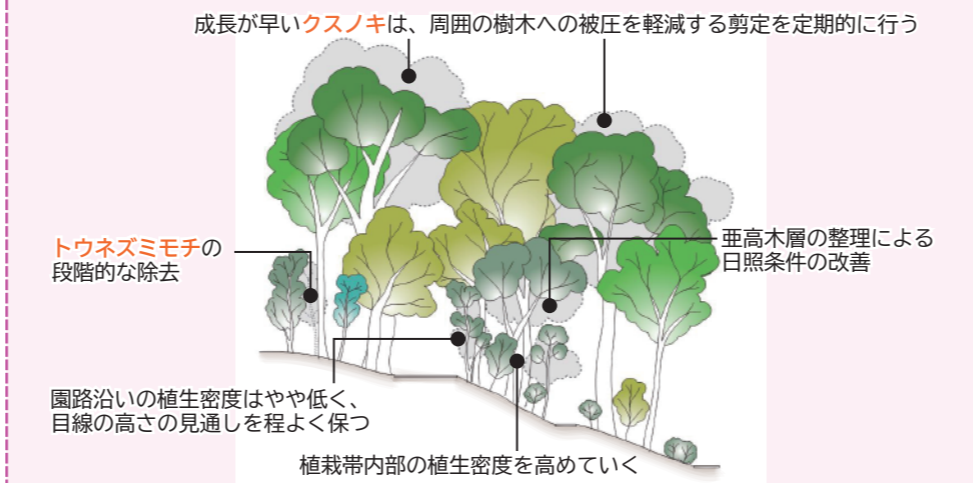
項目	内容等	頻度・時期等
実生木や草本類の選択的な育成	育成対象とする個体にマーキングし、周囲に密生した樹木や草本類を必要に応じて整理する	毎年
高木層（クスノキ）の剪定	階段脇のものは周囲のシラカシへの置き換えを視野に、それ以外は被圧軽減や日照確保のための剪定を行う	数年ごと
亜高木層の整理	林床への日照確保による草本類の育成を目的に、適度な剪定や間引き等を行う	林床の状況を見ながら必要に応じて行う
下草刈り（ササ等）	育成対象の実生木や草本類に留意して行う	毎年
外来種の除去（トウネズミモチ等）	日照や見通しを遮るものを優先して伐採する（周囲の食餌木の分布を考慮し、急激な変化を避けて行う）	適宜

※具体的な管理対象は、樹林の状況を見極めながら、都度検討します。
※上記のほか、安全確保や樹木の健全な育成等に係る日常管理を適宜行います。

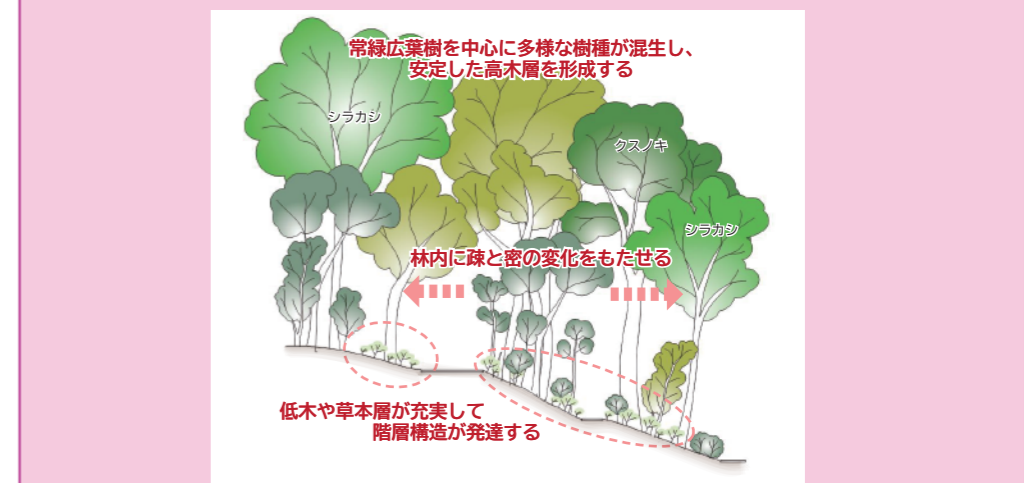
現状断面イメージ（A-A'）



中期断面イメージ（A-A'）



将来断面イメージ（A-A'）



エリアの現状

「唯物園」北側の斜面地であり、過去の整備（神秘洞修復）によって上空に見通しが効き、先駆植物の繁茂が進んでいますが、エリア東側を中心に、高木やヤブで覆われている箇所もあります。エリア中央部は、林縁としての植生が不足しており、背後の樹林内に風や直射日光が入りやすい状況になっています。エリア西側を中心に急斜面地の表土流出が見られ、植生の定着がしづらい状態です。



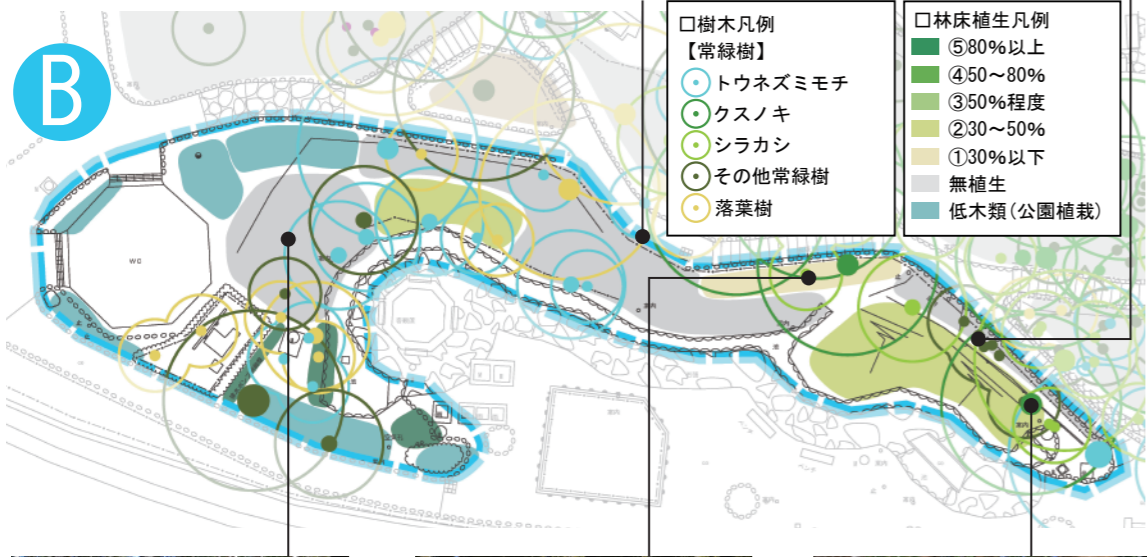
「唯物園」の背景となる斜面として、景観に配慮する必要がある



林内に直射日光が入り、土壌の乾燥等が懸念される



階段沿いに実生から成長したシラカシが密生する



急斜面地に植生が根付かず、斜面があらわになっている



ヤブで覆われ、アカマツの実生木が被圧されている

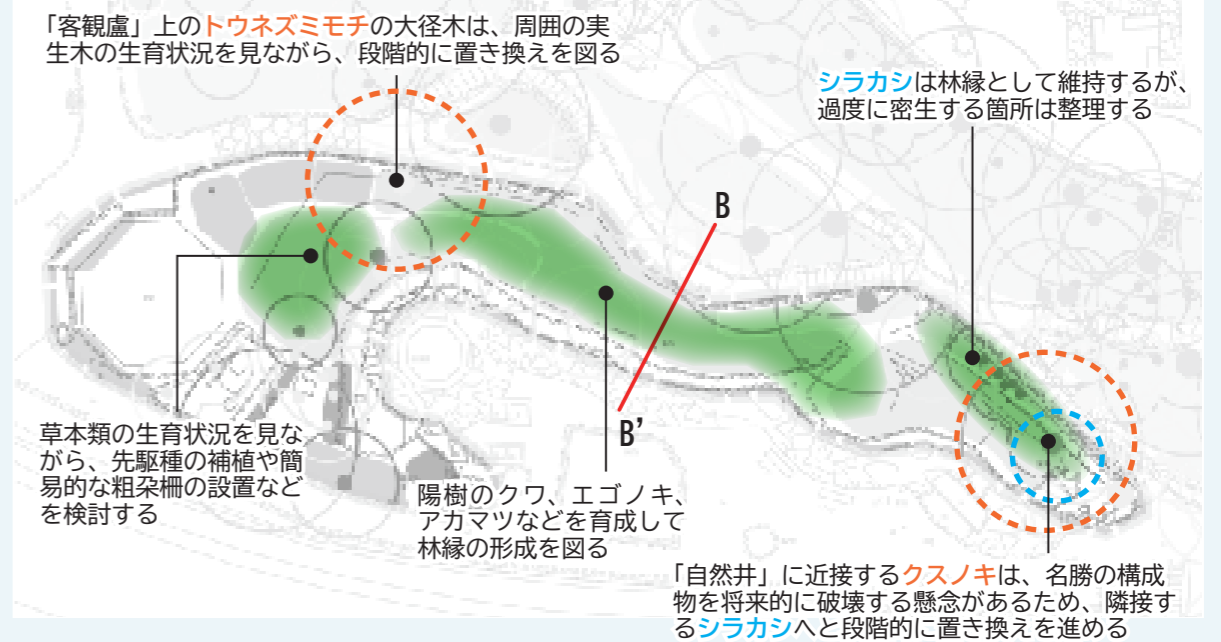


クスノキの根が「自然井」に近接している

エリアの管理方針

「唯物園」の背景となる斜面景観を良好に整えながら、林縁として適切な植生の維持・回復に取り組みます。また、急斜面地に多様な低木や草本類が生育する環境を維持し、生物の生息環境の充実と、表土の安定を図ります。

- ・斜面の保持に留意しながら、クワやエゴノキ、創建当時の姿を伝えるアカマツなど、陽樹の実生木を選択的に育成し、林縁植生の回復を図ります。
- ・「唯物園」から見える景観を良好に保つため、密生し過ぎた実生木は選択的に整理し、定期的な下草刈りを行います。
- ・林縁は多くの生物の隠れ家や餌場ともなるため、多様な低木や草本類などが生育する環境を維持します。
- ・急斜面に草本類が根付かない場合は、法面に生育しやすい先駆種の補植や簡易的な粗朶柵の設置などを検討し、表土の安定を図ります。

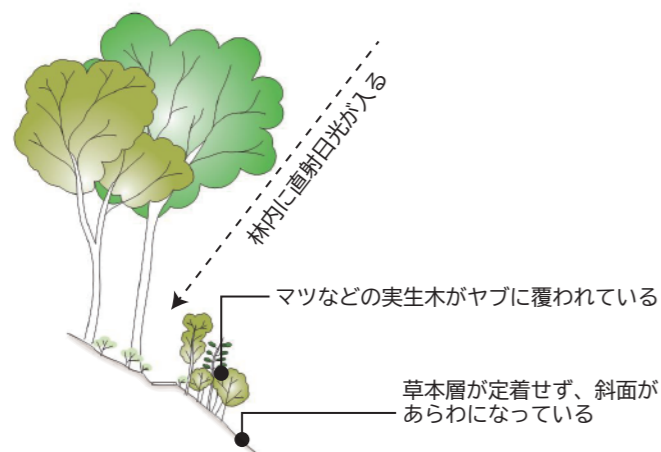


主な管理作業の内容

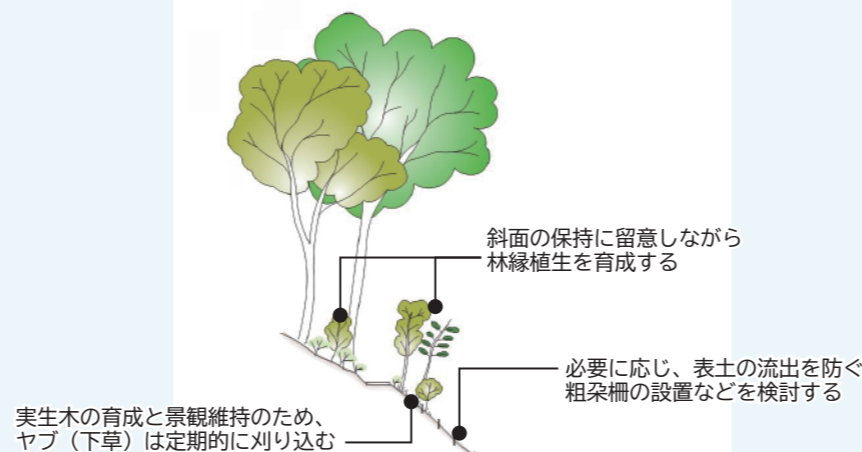
項目	内容等	頻度・時期等
陽樹の実生木や草本類の選択的な育成	育成対象とする個体にマーキングし、周囲に密生した樹木や草本類を必要に応じて整理する	毎年
「自然井」に近接するクスノキの剪定	周囲のシラカシへの置き換えを視野に、同種を被圧する枝葉等を優先して段階的に抑制を図る	適宜
下草刈り	育成対象の実生木や草本類に留意し、「唯物園」の背景としての景観形成を踏まえて行う	毎年
法面の保護	先駆種の補植や簡易的な粗朶柵の設置など	必要に応じて
階段脇のシラカシの剪定	健全な成長を促すことを目的に、過度に密生する箇所を整理する	必要に応じて
外来種の除去（トウネズミモチ等）	「客観慮」上の大径木は、育成対象とする周囲の実生木を被圧する枝の剪定などを段階的に行う	適宜

※具体的な管理対象は、樹林の状況を見極めながら、都度検討します。
※上記のほか、安全確保や樹木の健全な育成等に係る日常管理を適宜行います。

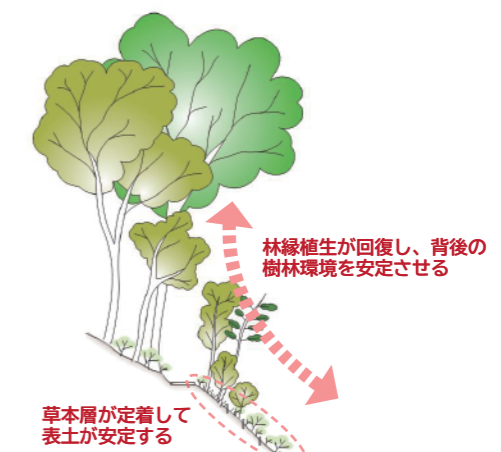
現状断面イメージ (B-B')



中期断面イメージ (B-B')



将来断面イメージ (B-B')



エリアの現状

「経験坂」や「三祖苑」などが位置する斜面地であり、クスノキの大径木が連なって樹冠を形成しています。全体的に常緑広葉樹が密集して林床は暗く、急斜面地では表土の流出が見られます。また、樹木の根の伸長により、名勝の構成物等の破損につながり得る箇所があります。筆塚から六賢台にかけては、エノキやエゴノキなどの落葉広葉樹も見られます。



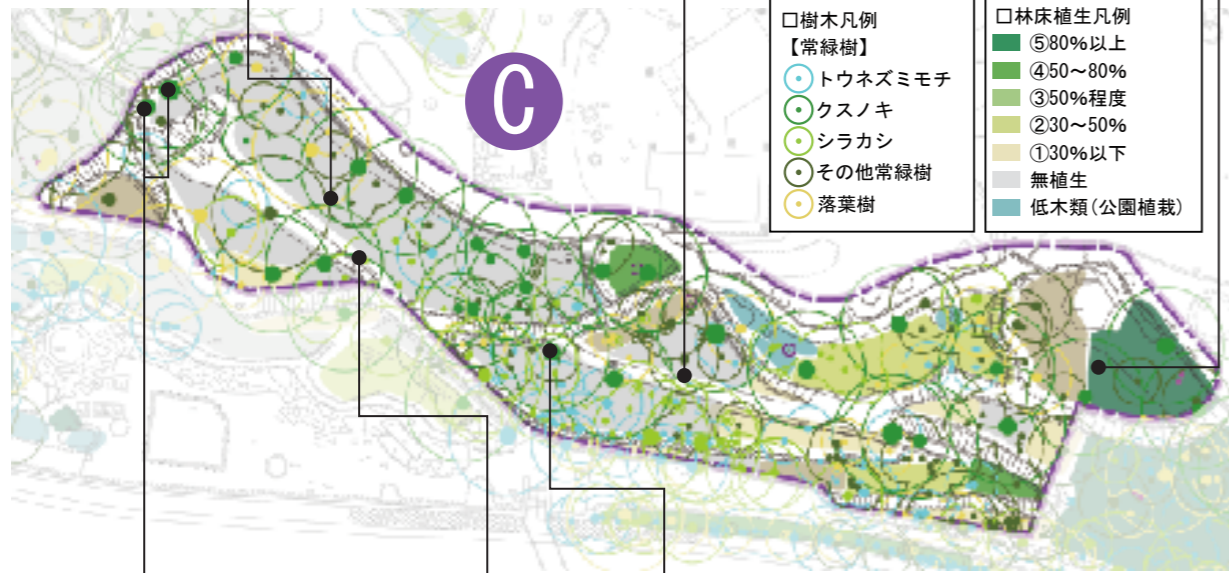
「三祖苑」東側の林内は階層構造に乏しい



「懷疑巷」~「経験坂」周辺は最も林内が暗く、地形も急峻である



「六賢台」周辺は比較的明るく、草本類も生育するが、建物に近接する枝もある



クスノキの根が「三字壇」に近接し、破損が広がる懸念がある



クスノキに隣接してシラカシが生育する様子が見られる

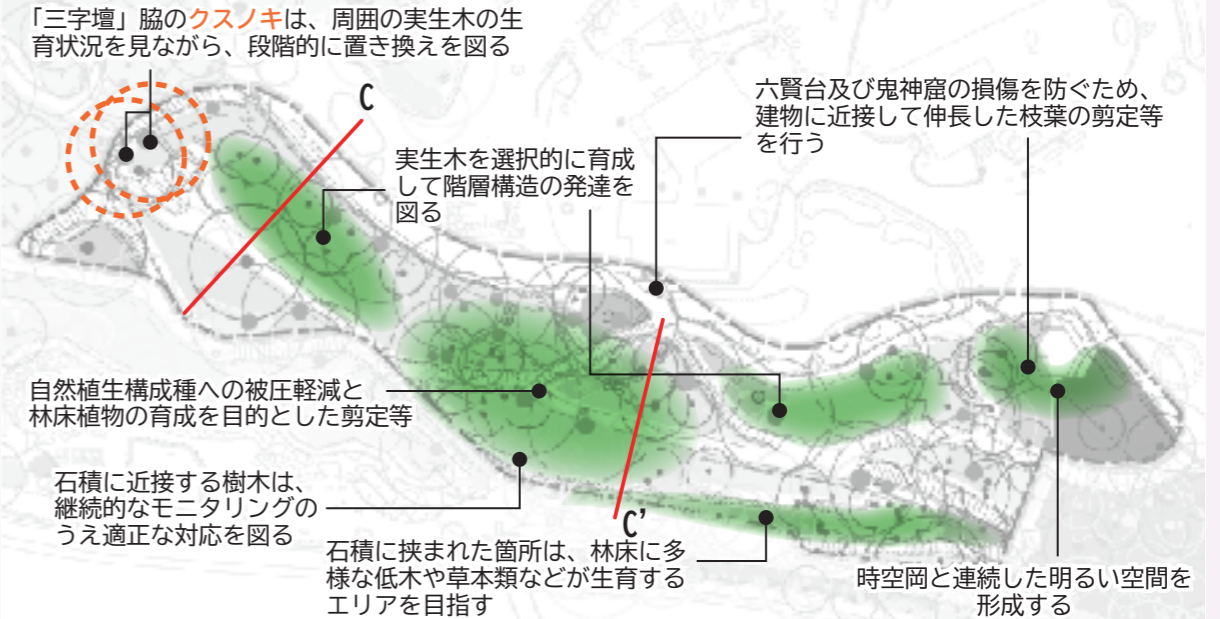


川沿いの石積に近接して樹木が生育する(※石積診断実施済)

エリアの管理方針

自然植生構成種が多種共存する、成熟した常緑広葉樹林への誘導を図るとともに、地形や名勝の構成物と植生が共存できる環境を維持します。また、多様な環境を残しながら低木や草本類の生育を促し、表土の安定を図ります。

- 樹冠を形成するクスノキのうち、名勝構成物に影響を及ぼすものは、周囲のシラカシ等へと段階的な置き換えを図ります。
- クスノキと自然植生構成種の競合が見られる箇所は、被圧軽減のための剪定等により、多様な樹種が混在できる環境を整えます。
- 階層構造に発達への余地がある箇所は、実生木の選択的な育成を行います。
- 名勝の構成物(哲学堂七十七場や石積等)の保全に支障をきたす樹木は、適正な処置を行う必要があります。

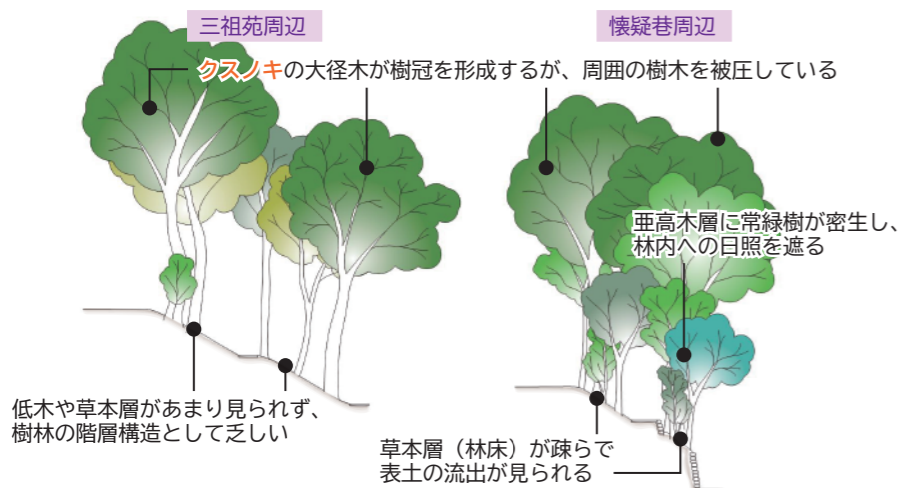


主な管理作業の内容

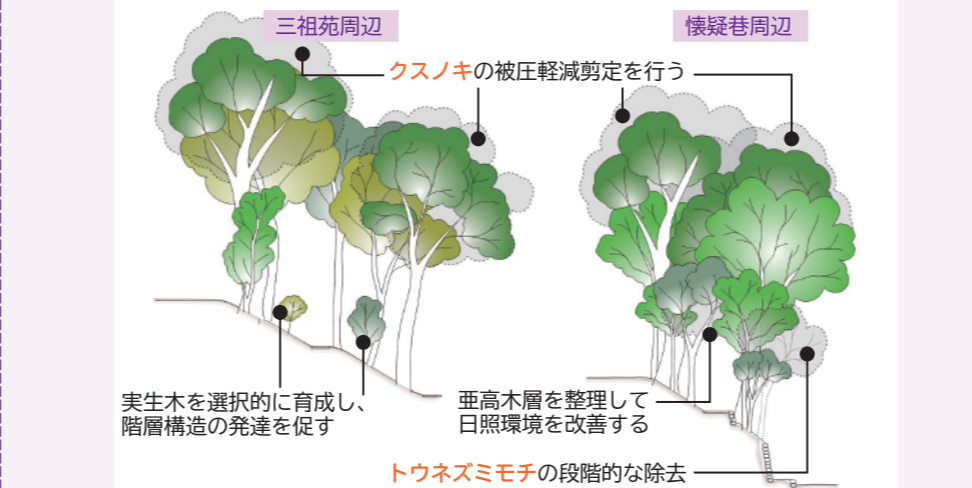
項目	内容等	頻度・時期等
高木層(クスノキ等)の剪定	将来的な周囲の樹木への置き換え、または被圧軽減や日照確保のための剪定を行う	数年ごと
亜高木層の整理	林床への日照確保による草本類の育成を目的に、茂みを残しながら、適度な剪定や間引き等を行う	適宜
石積周辺の大径木への安全措置	別途実施した石積診断調査結果や今後のモニタリング結果に基づき、石積への風圧等を軽減する強剪定など、必要な措置を行う	数年ごと
法面の保護	耐陰性のある草本類の補植や簡易的な粗朶柵の設置など	必要に応じて
外来種の除去(トウネズミモチ等)	日照や見通しを遮るものを優先して伐採する(周囲の食餌木の分布を考慮し、急激な変化を避けて行う)	適宜
実生木や草本類の選択的な育成	階層構造の発達等を促す箇所、育成対象とする個体にマーキングし、周囲に密生した樹木や草本類を必要に応じて整理する	毎年

※具体的な管理対象は、樹林の状況を見極めながら、都度検討します。
 ※上記のほか、安全確保や樹木の健全な育成等に係る日常管理を適宜行います。

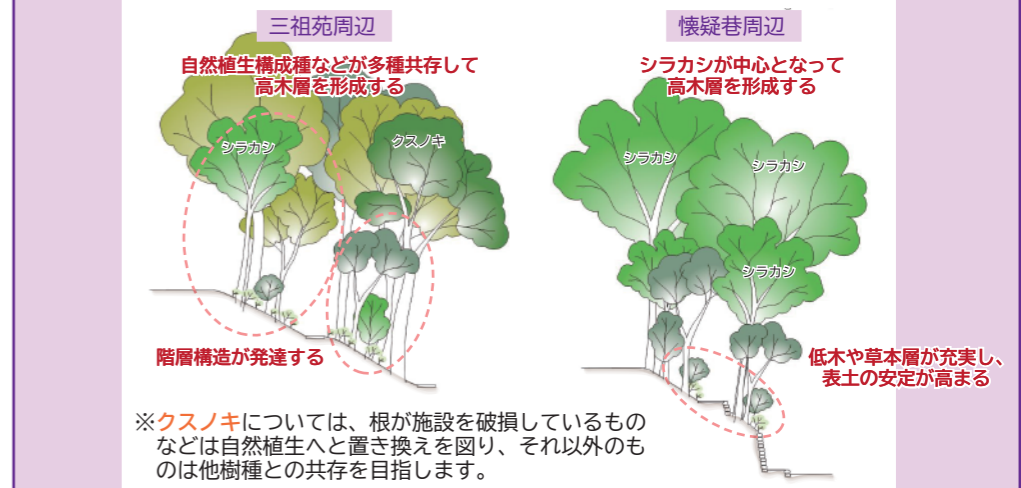
現状断面イメージ(C-C')



中期断面イメージ(C-C')



将来断面イメージ(C-C')



エリアの現状

「独断峡」の石積や園路と妙正寺川に挟まれた部分に、実生から成長した細い樹木が密生し、林縁としての植生を形成しています。対岸の人工物を遮蔽し、特徴ある景観を形成していますが、歩行者にやや鬱蒼とした印象を与えています。エリアの東側は、一部草本類のみが生育し、視界が開けています。

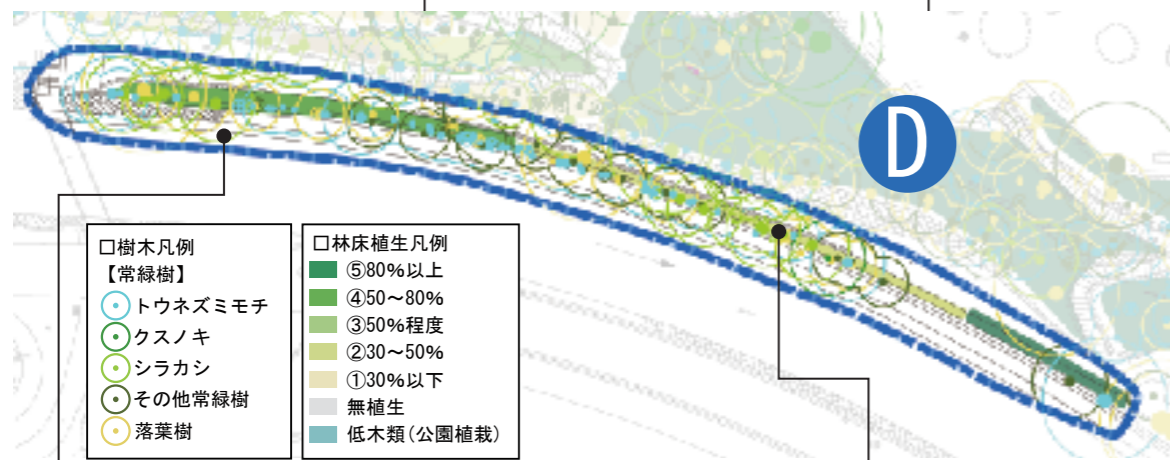
林床はアズマネザサやアイビーで覆われるほか、より若い実生木も見られます。



枝の細い実生木が、常緑広葉樹を中心に密生し、やや粗雑な印象を与える



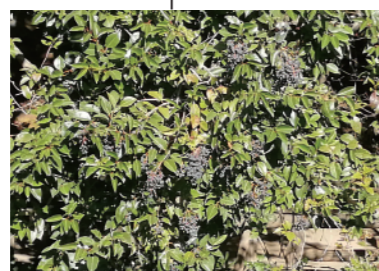
エリア東側はアズマネザサとクズが覆い、視界が開ける



- 樹木凡例
 - 【常緑樹】
 - トウネズミモチ
 - クスノキ
 - シラカシ
 - その他常緑樹
 - 落葉樹
- 林床植生凡例
 - ⑤80%以上
 - ④50~80%
 - ③50%程度
 - ②30~50%
 - ①30%以下
 - 無植生
 - 低木類(公園植栽)



背後の高木層と相まって樹林の外観を作り出しているが、河川側へと伸長した枝も目立つ



トウネズミモチの実が大量に結実している

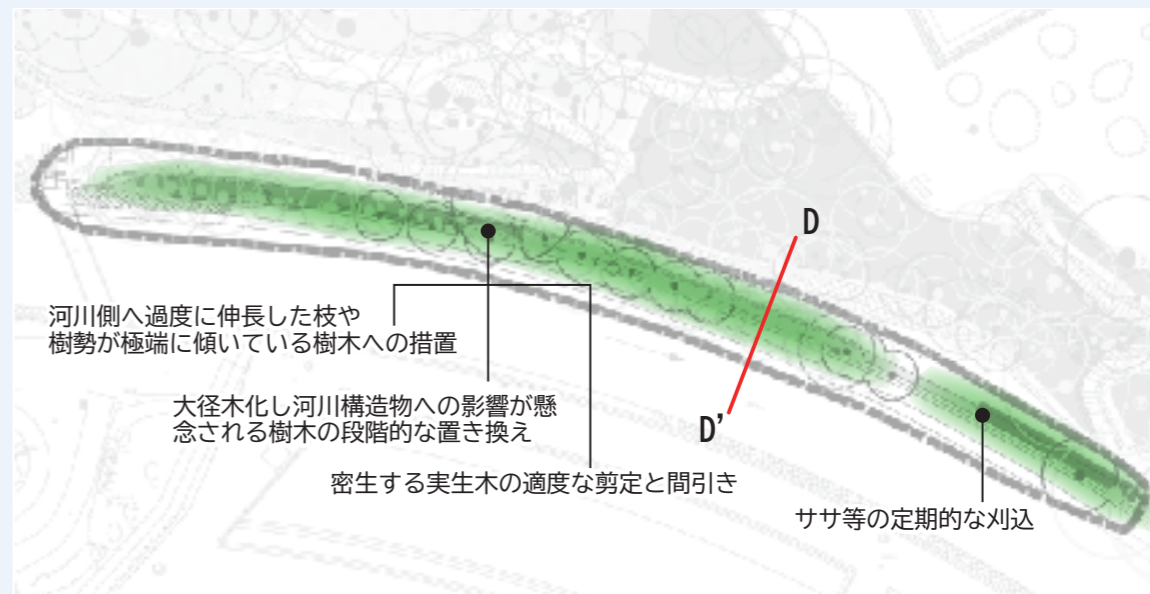


密生する実生木の中には生育の悪いものも見られる

エリアの管理方針

林縁としての機能と特徴ある景観を保ちながら、園路通行者に過度な圧迫感や粗雑な印象を与えないよう、適度な修景に努めます。また、河川構造物等への影響を考慮し、多様な樹種が混生する若齢林として維持します。

- ・密生する実生木は、生育の悪いものや視界を極端に遮るもの、外来種(トウネズミモチ)を中心に、適度な剪定や間引きを行います。
- ・河川側へと過度に伸長した枝や、樹勢が極端に傾いている樹木については、安全確保のために必要な措置を行います。
- ・大径木化し河川構造物への影響が懸念される場合には、周囲の若齢木へと段階的に置き換えを図ります。
- ・アズマネザサやクズは、転落防止柵の高さを目安に、刈込で維持します。



河川側へ過度に伸長した枝や樹勢が極端に傾いている樹木への措置

大径木化し河川構造物への影響が懸念される樹木の段階的な置き換え

密生する実生木の適度な剪定と間引き

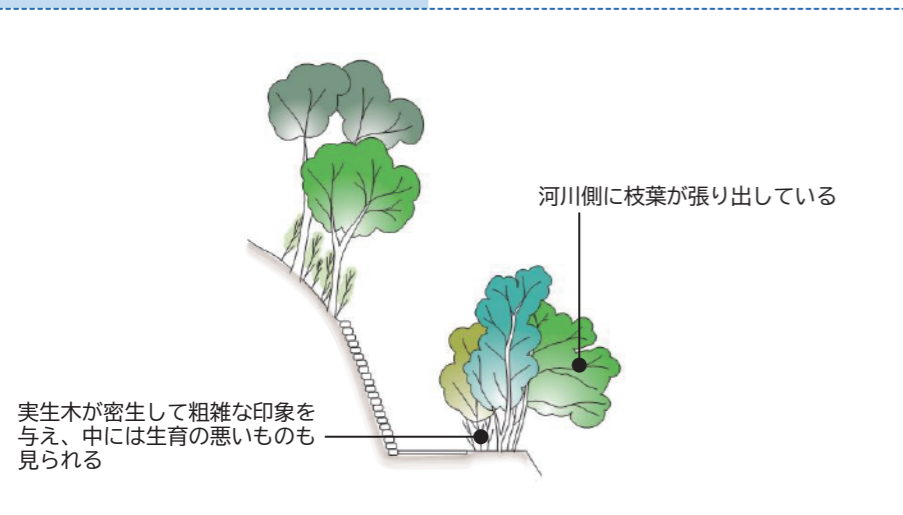
ササ等の定期的な刈込

主な管理作業の内容

項目	内容等	頻度・時期等
実生木の整理	対岸を遮蔽する景観を維持する範囲内で、生育の悪いものや視界を極端に遮るもの、外来種を中心として行う	適宜
支障枝の剪定等	河川側へと過度に伸長した枝や樹勢が極端に傾いている樹木などを対象として行う	数年ごと
河川構造物への影響が懸念される大径木の剪定	周囲の若齢木への段階的な置き換えを視野に行う	必要に応じて
下草刈り(ササ等)	転落防止柵の高さを目安として行う	毎年
外来種の除去(トウネズミモチ等)	日照や見通しを遮るものを優先して伐採する(周囲の食餌木の分布を考慮し、急激な変化を避けて行う)	適宜

※具体的な管理対象は、樹林の状況を見極めながら、都度検討します。
 ※上記のほか、安全確保や樹木の健全な育成等に係る日常管理を適宜行います。

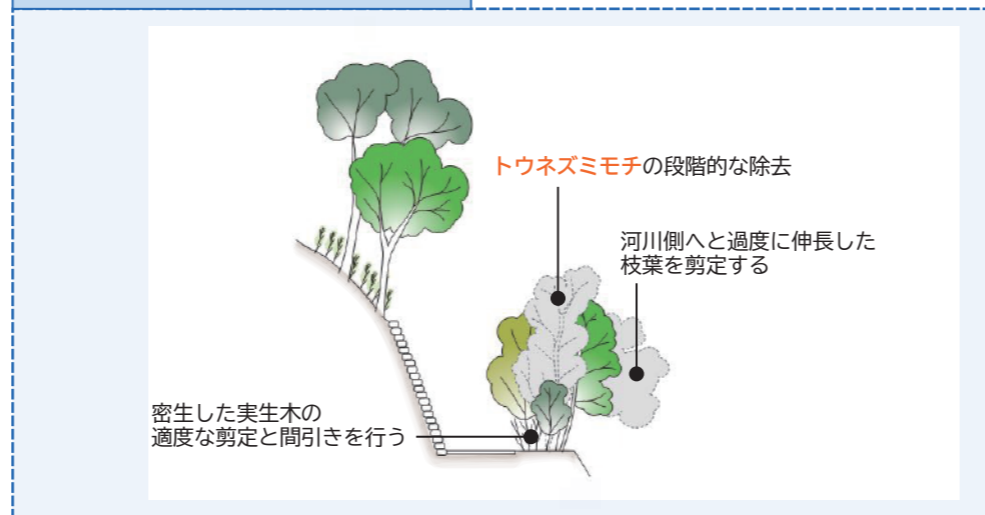
現状断面イメージ(D-D')



河川側に枝葉が張り出している

実生木が密生して粗雑な印象を与え、中には生育の悪いものも見られる

中期断面イメージ(D-D')

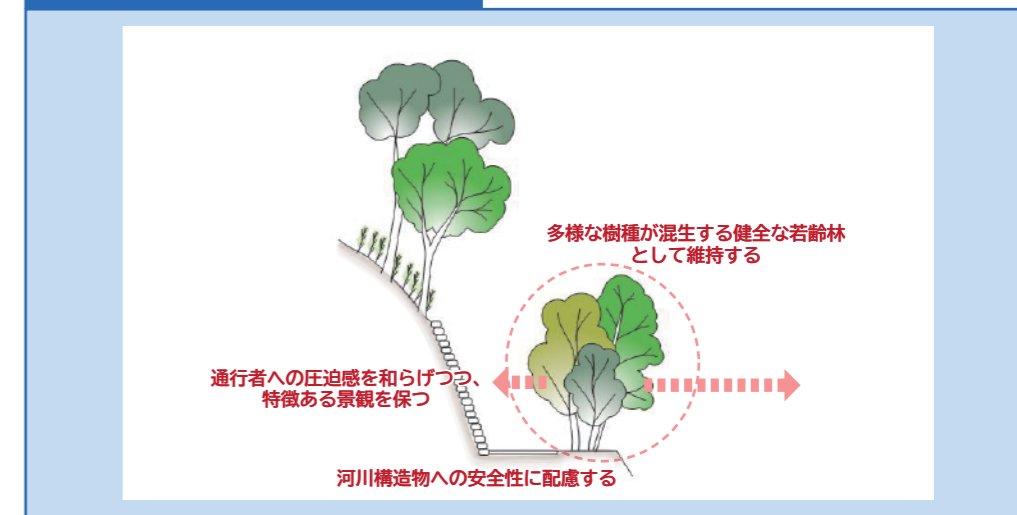


トウネズミモチの段階的な除去

河川側へと過度に伸長した枝葉を剪定する

密生した実生木の適度な剪定と間引きを行う

将来断面イメージ(D-D')



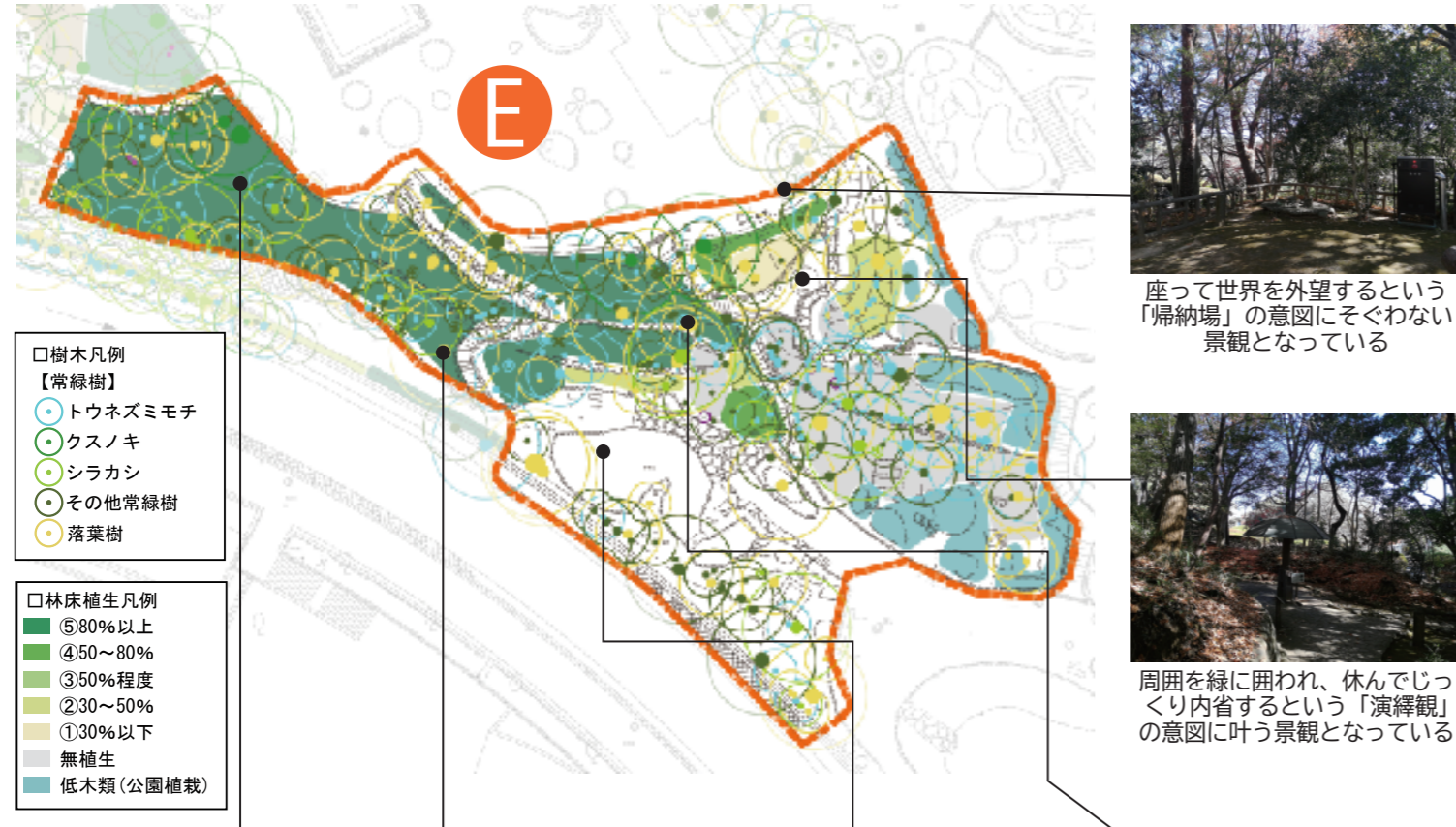
多様な樹種が混生する健全な若齢林として維持する

通行者への圧迫感を和らげつつ、特徴ある景観を保つ

河川構造物への安全性に配慮する

エリアの現状

「独断峡」、「論理域」、「唯心庭」が位置する斜面地であり、園内では数少ない、コナラやエノキなどの落葉広葉樹が高木層に点在しますが、近年のナラ枯れ病の被害などにより、樹冠に隙間が生じています。
 また、亜高木層には常緑広葉樹が密生している箇所も見られ、落葉広葉樹の被圧につながることも、「意識駅」や「帰納場」からの眺望を遮っています。
 林床は、アズマネザサで覆われている部分と、裸地になっている部分に分かれ、実生木も多く見られます。



座って世界を外望するという「帰納場」の意図にそぐわない景観となっている



周囲を緑に囲われ、休んでじっくり内省するという「演繹観」の意図に叶う景観となっている



「独断峡」上部にはアズマネザサが繁茂し、樹林としての階層が見られない



落葉広葉樹が高木層に点在し、新緑や紅葉など四季の変化を感じられる



高木層が密生し、「心字池」と一体をなす景観としての調和や繊細さに欠ける

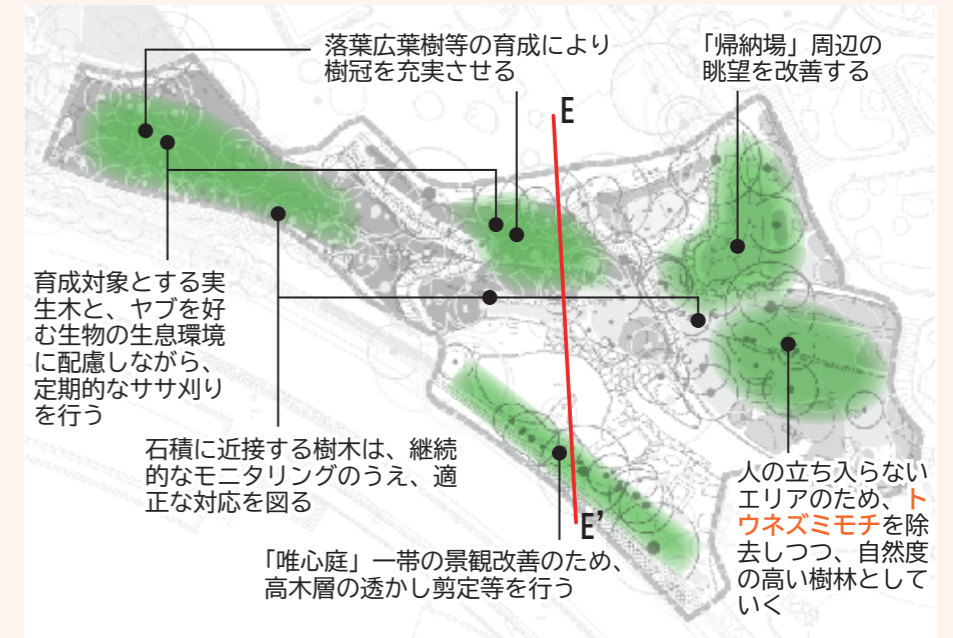


コナラの大径木がナラ枯れ病に罹患して枯死し、樹冠に隙間が生じている

エリアの管理方針

周囲のエリアへと樹冠が連なる、緑量豊かな常落混交林の形成を目指し、次世代の高木層を担う多様な落葉広葉樹等の育成を進めます。
 「唯心庭」や「論理域」の周辺は、哲学堂七十七場としての設置意図を踏まえた景観の改善を図ります。
 林床はアズマネザサを刈込で維持しつつ、落葉広葉樹の下で多様な草本類が生育できる環境を整えます。

- ・育成すべき落葉広葉樹等は、病害虫への耐性も考慮し、多様な樹種が混生できるように選定します。これらを被圧する常緑広葉樹等については、剪定等を適時に行います。
- ・「帰納場」及び「演繹観」からの景観に配慮し、周辺の亜高木層の剪定や間引き等を行います。
- ・「心字池」周辺は、高木層の透かし剪定などにより、木漏れ日の注ぐような景観形成を目指します。
- ・石積の保全に支障をきたす樹木は、適正な処置を行う必要があります。

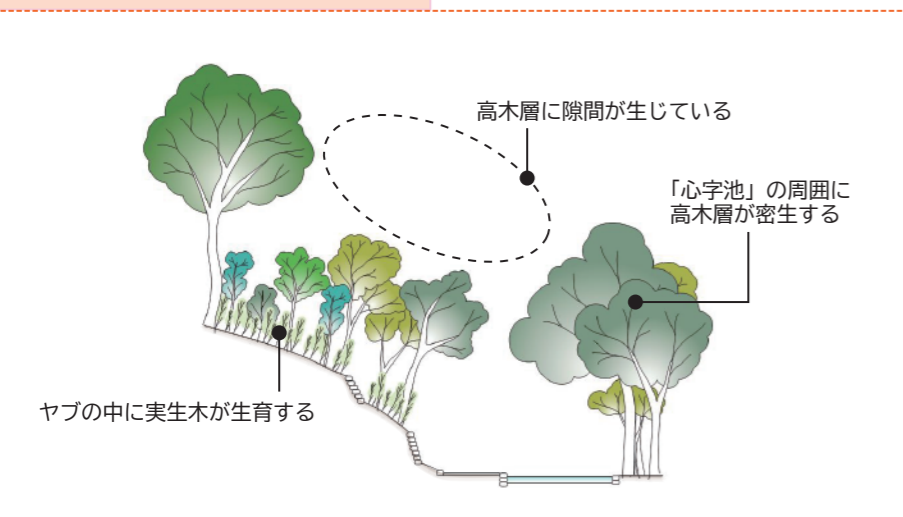


主な管理作業の内容

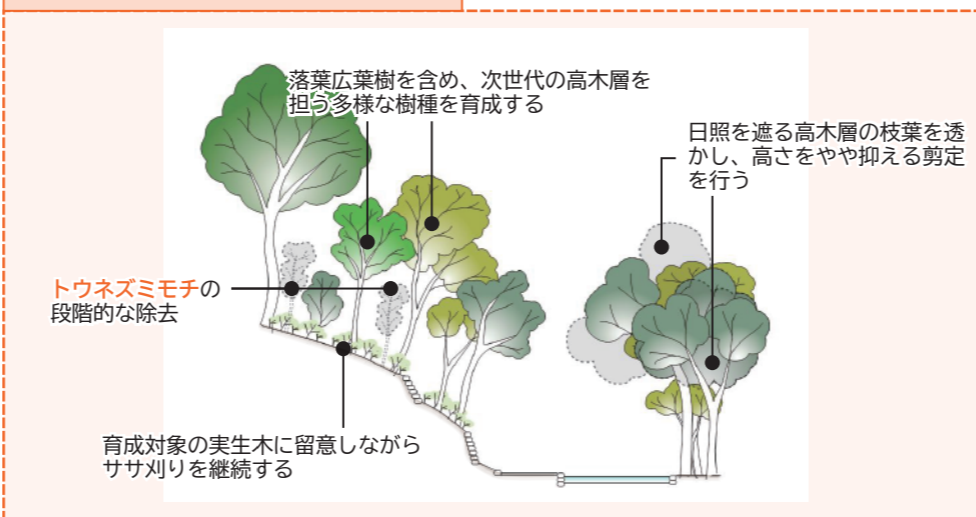
項目	内容等	頻度・時期等
実生木や草本類の選択的な育成	育成対象とする個体(落葉広葉樹を中心に)にマーキングし、周囲に密生した樹木や草本類を必要に応じて整理する	毎年
常緑広葉樹の剪定	亜高木層を中心とした落葉広葉樹への被圧軽減と、「心字池」周辺の修景を目的として行う	適宜
「帰納場」周辺の亜高木層等の整理	「演繹観」周囲の景観を過度に変更しない範囲で、丘上からの見通しにかかる枝葉等を整理する	林床の状況を見ながら必要に応じて行う
ササ刈り	人の立ち入らないエリアなどを高く刈り残すとともに、育成対象の実生木や草本類に留意して行う	毎年
外来種の除去(トウネズミモチ等)	日照や見通しを遮るものを優先して伐採する(周囲の食餌木の分布を考慮し、急激な変化を避けて行う)	適宜

※具体的な管理対象は、樹林の状況を見極めながら、都度検討します。
 ※上記のほか、安全確保や樹木の健全な育成等に係る日常管理を適宜行います。

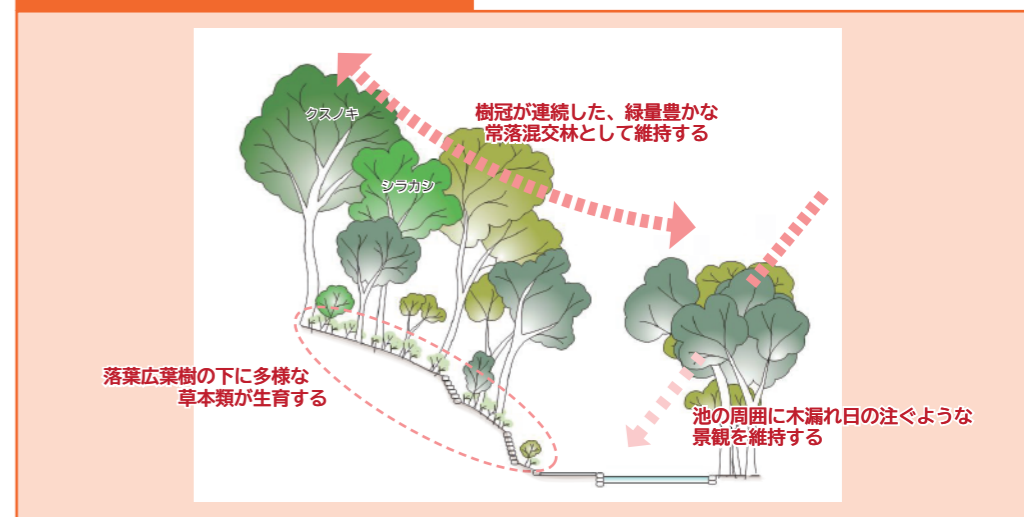
現状断面イメージ (E-E')



中期断面イメージ (E-E')



将来断面イメージ (E-E')



エリアの現状

中野通りの擁壁上に位置する斜面で、テニスコートの外周部にあたります。エリア西側はフェンスで囲われて人の立ち入りが出来ず、自然植生であるシラカシやスタジイを中心に、多様な樹種が入り混じる常落混交林となっており、擁壁沿いなどには草本類や萌芽再生木がヤブ状に繁茂しています。

エリア東側は喫煙所と中野通りを隔てる植栽帯ですが、樹林としての林相は見られず、草本類も乏しい状況です。

- 樹木凡例
【常緑樹】
● トウネズミモチ
● クスノキ
● シラカシ
● その他常緑樹
● 落葉樹

- 林床植生凡例
■ ⑤80%以上
■ ④50~80%
■ ③50%程度
■ ②30~50%
■ ①30%以下
■ 無植生
■ 低木類(公園植栽)

F



中野通りの歩道に対して枝葉の伸長や強雨時の土砂流出が見られ、安全への配慮が求められる



喫煙所を囲うようにトウネズミモチなどの垂高木層が生育する



自然林に近い林相をなしているが、林床植生に乏しい



擁壁に沿って萌芽再生木が繁茂し、ヤブ状を呈している

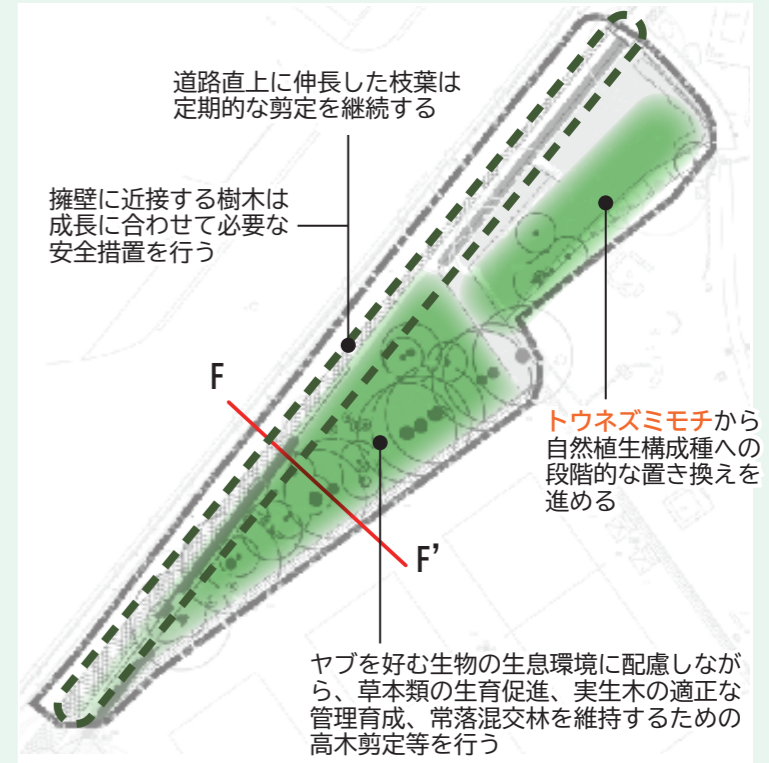


テニスコート外周の高木層は緩衝植栽としての役割を持つ

エリアの管理方針

人の立ち入りがほぼ無いため、階層の発達した自然林に近い常落混交林として維持しつつ、周囲の安全性について一層の配慮を行います。高木層は、テニスコート場内灯を遮光する役割を持たせつつ、近隣住宅への日照を過度に遮らないよう管理します。

- ・実生木は過度に密生しないよう、自然植生構成種を選択的に育成しつつ、早期の整理に努めます。
- ・中野通りへの土砂流出を防ぐため、林内に適度な日照を確保し、草本類の育成を図ります。
- ・落葉広葉樹への被圧を軽減する剪定等により、多様な樹種が混生できる環境を維持します。その際は、テニスコートからの光漏れに留意して行います。
- ・喫煙所周辺は、緩衝帯としての機能を維持しつつ、段階的に自然植生構成種への置き換えを図ります。



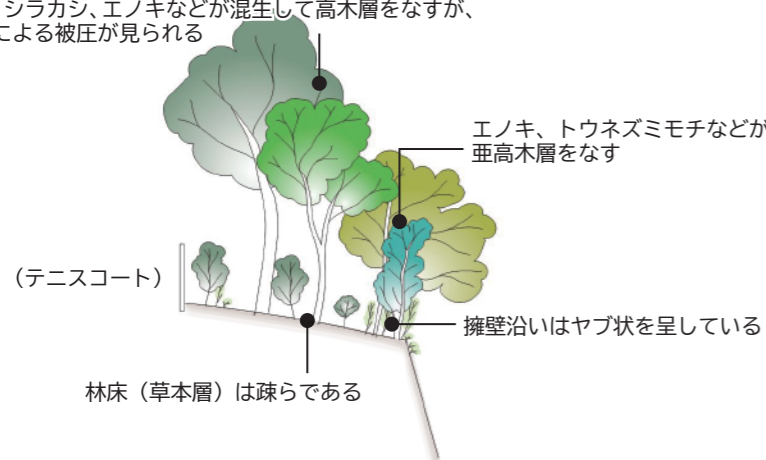
主な管理作業の内容

項目	内容等	頻度・時期等
林内の低木や草本層の整理	自然植生構成種を選択的に残しながら、密生し過ぎた低木や草本類の剪定・間引き等を行う	適宜
高木層の剪定	落葉広葉樹の被圧軽減と、林内への適度な日照確保、越境枝の整理を目的として行う	数年に一度
中野通りやテニスコートへの越境枝の剪定	低木や垂高木層については、日常点検を定期的に行い頻度良く対応する	適宜
擁壁に近接する樹木の安全措置	大径木化して根が擁壁の安全性に影響すると判断された樹木の強剪定、伐採等を行う	必要に応じて
外来種の除去(トウネズミモチ等)	喫煙所周辺については、周囲への自然植生構成種の育成状況を勘案して段階的に行う	適宜

※具体的な管理対象は、樹林の状況を見極めながら、都度検討します。
※上記のほか、安全確保や樹木の健全な育成等に係る日常管理を適宜行います。

現状断面イメージ (F-F')

スタジイ、シラカシ、エノキなどが混生して高木層をなすが、スタジイによる被圧が見られる



中期断面イメージ (F-F')

スタジイの被圧軽減剪定を行う

テニスコート内への越境枝は適時に剪定する

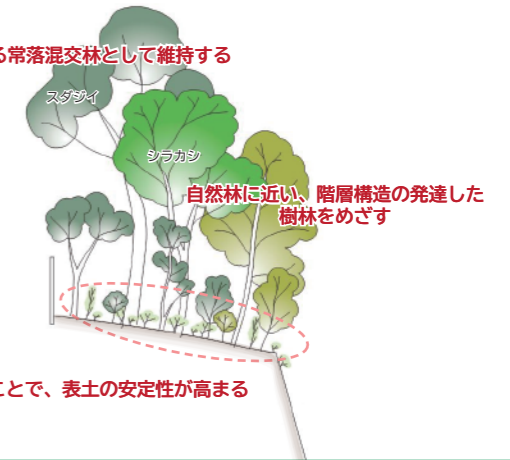
中野通りへの越境枝は適時に剪定する

ヤブ状の場所を適度に残しながら、密生し過ぎた低木や草本類を整理する

トウネズミモチの段階的な除去

将来断面イメージ (F-F')

多様な樹種が混生する常落混交林として維持する



樹林内において自然度の高い環境を保ち、さまざまな生きものの生息に配慮するため、管理にあたっては以下のような工夫を行っていきます。

作業後の剪定枝や切り株を園内に残す

剪定や草刈などの作業の発生材はすぐに処分せず、園内に一時集積することで、そこにいた生物が土に還っていくよう配慮します。

また、枯死した樹木は昆虫などの餌ともなるため、あえて樹林内に一部を残すことで、生物生息の場として活用します。



剪定発生材の一時集積



(出典:川崎市「生物多様性の保全に取り組む方々へのメッセージ～活動ポイント事例集～」)

生きものを守る

樹林内の落ち葉は表面が少し残る程度にかき取る

落ち葉かきは、表土の種子に光を当てて、林床植物の発芽を促進する場合があります。ただし、表土の保全のため、表面に薄く落ち葉が残る程度にかき取ります。かき取った落ち葉は、たい肥化することも可能です。

このような作業は、樹林に対する愛着を育てることにもつながるので、落ち葉かきをイベントとして行うことなども検討します。



適度な落ち葉かき (出典:相模原市「さがみはら森林ボランティア入門ガイド」)

後継樹を育てる

自然に対する理解を広める

残すべき実生木にマーキングする

林内には多数の実生木が生育しているため、そのうちどれを残して育てていくか分かるよう、マーキングを行うことが有効です。

これにより、誤って踏んだり切ってしまうことを防ぐとともに、次の世代の樹林を担う樹木の分布状況が、利用者にも一目で分かるようになります。



(出典: <https://www.seibu-green.co.jp/inariyama/blog/2022/02/page/2/>)

後継樹を育てる

自然に対する理解を広める

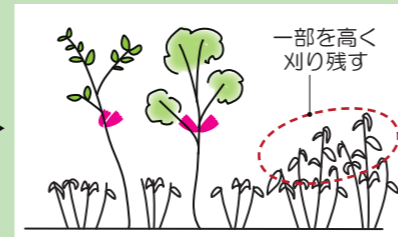
ササ刈りは実生木に留意し、一部を高く刈り残す

ヤブ状になったアズマネザサの中には、育成すべき実生木が生育しています。ササを一律に刈り込むと、これらの実生木が残らなくなってしまうため、予めマーキングした実生木の周辺は、とくに留意して作業を行います。

また刈込の際、園路から離れた場所など一部を高く刈り残すことで、ヤブを好む生物の生息場所を残すよう配慮します。



実生木へのマーキング



後継樹を育てる

生きものを守る

食餌木や蜜源植物となる実生木を積極的に残す

現在、外来種であるトウネズミモチの大量の実が鳥類の餌となっている現状があるため、これを今後段階的に除去していくにあたり、新たに食餌木となる樹木を実生から育てていくことが望まれます(ただし、樹林としての自然な姿を尊重しつつ行います)。

併せて、昆虫類の蜜源となる植物の育成にも努めることで、生物多様性の向上を図ります。



ヒサカキの実とメジロ



コナラの樹液を吸うコクワガタ

生きものを守る

植物や生きものの観察会を実施する

哲学堂公園に生息するさまざまな植物や生きものを観察し、生物多様性について学べる機会を提供するための観察会を、指定管理者と連携のもと、継続的に実施していきます。

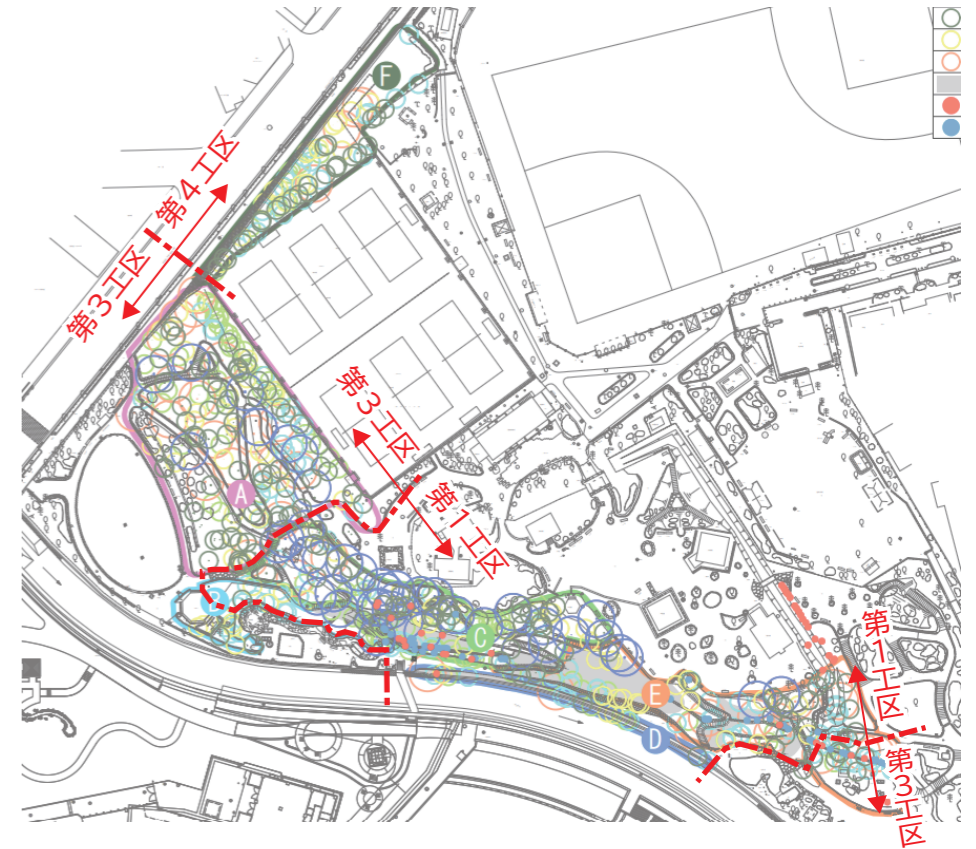
その際などに見られた種名などをデータとして蓄積し、種の増減や貴重種の存在など現状把握に努めた上で、その後の管理に生かしていくことも重要です。



自然に対する理解を広める

初期整備(再整備工事)を終えたエリアから順次、計画的な取組を開始していきます(日常的な管理は、これまで通り継続します)。

ただし、1つのエリアで集中的に作業を行うのではなく、樹林地全体を見て少しずつ進めていくこととし、状態を変化させていくことに捉われず、現状の姿を尊重し、推移をよく観察しながら、順応的に管理を進めていきます。



項目	年次(予定)									
	R8	R9	R10	R11	R12	R13	R14	R15	R16以降	
初期整備(再整備工事)	第1工区(斜面地周辺)	←			※石積診断結果による					
	第2工区(時空間・児童遊園周辺)		←							
	第3工区(さくらの広場・つつじ園周辺)			←						
	第4工区(エントランス・運動施設周辺)				←					
長期的管理	Aゾーン							→		
	Bゾーン	下記以外						→		
		さくらの広場 トイレ周辺							→	
	Cゾーン							→		
	Dゾーン							→		
	Eゾーン	下記以外							→	
菖蒲池周辺								→		
Fゾーン								→		